

文芸

俳句

配られし麦茶の癒す旅疲れ

池田 逸子

農日誌めくる独りの夜の秋

伊藤 敬子

花菱荷一日限りの白美人

今関満喜子

万緑や山に分け入る山頭火

魚地 照子

枝豆の殻積み友の聞き上手

江森 悦子

立読み書肆の雷雨の去るを待つ

川島 通則

病葉を除きて水を懸けにけり

向後 寛

夕立雲恵みの雨の何方へ

越川せつ子

仙人掌のとげとげに花咲きにけり

小松 藤男

摩線や鉄の匂ひと草いきれ

佐瀬 輝夫

柔かき素足なげ出し爪塗る子

椎名万里子

雷鳴を背なに聞きつつペダル踏む

鈴木とし子

雷や文明の代を笑いおり

鈴木 利子

手のひらがまないたがわり新豆腐

玉虫 栗扇

一瞬に風翻り雷近し

土屋美枝子

七十路の父母に欲し夕立雲

土屋 義昭

水やりてクリーム色の花菱荷

戸村 静華

夕立に丸ごと洗われる木々や家

内藤 くに

朝ご飯おかずは茄子の一夜漬

早川 勇

沢音に吐き出されたる蜚かな

藤田 雅夫

短歌

穏やかなるわが家があれば月はじめ

高梨 キヨ

心あらたに庭花を活く

只今と女房退院帰宅せり

越川 義則

曇り空木槿の花の紅冴えて

伊藤 定男

ひと日の命惜しみ眺むる

.....

七分まで伸びしゴーヤのカーテンの

.....

.....

.....

.....

.....

里芋の葉つば分厚く緑濃く

はち切れむばかりの芋虫潜む

押尾 輝子

農薬の散布終へたるへリコプター

青木 秀子

吾が家の庭に洗はれぬたり

わが訪れを待ちてくれをり

田崎 尚美

父方の同胞七人見送りにて

最後の叔母も一周忌迎ふ

鈴木まさ子

汚れなどなき頃の吾がここにゐる

中学校の同窓会に

八角 三枝

早朝に梅雨が明けたと告げること

みんみん蟬が鳴き始めたり

浅野 榮子※

暑き日の仕事を終えて湯に入れば

入浴剤のしゅわしゅわとたつ

椎名美枝子※

若連が稽古するらし遠くより

祭囃子が風にのりくる

加瀬 弘子※

夏の日を義姉の命日訪ぬれば

うからは優しく迎へくれたり

平山 芳子

千羽鶴いくつも下がる講堂に

冴えし尺八の音の響くも

斉藤つね子

※は新かな使いです。

こうほう 博物館 66

西から来た弥生土器

今から約二千年前、西の方から稲作文化を携えた人々がこの町にやってきた。その人々は弥生人とも呼ばれ、それまでこの地に住んでいた縄文人に稲作を教え、縄文人と融和して新しい文化を創造した。

その証拠となるものが、今回紹介する土器である。写真の土器は長倉の宮ノ前遺跡から出土した壺形の器である。上半分が無くなっているの、全体の形は分



▶宮ノ前遺跡から出土した器

からないが、残っている下半分の形と、器の表面についている模様や色から、類例の土器と照らし合わせたところ、愛知県の名古屋から浜松あたりで出土する土器とよく似ていることが分かった。そのことから考えると、愛知県の弥生人がこの土器を持って、この地にやって来たのかもしれない。そしてこの地にいた縄文人と交わって、定着したのだろう。

宮ノ前遺跡に近い姥山貝塚でも、縄文から弥生時代へと変化していく土器が見られ、この地域が東の縄文人と西から来た弥生人との交流の地であったことが想像される。

町民ギャラリーでは、この秋に町の歴史の弥生から古墳時代の展示をする。

(社会文化課 道澤 明)